

教員研修の充実

－授業実践力診断カルテの作成を通して－

隈 元 浩二郎〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

Improvement of teacher training

－ Through the making of the class practice power diagnosis patient's record －

KUMAMOTO Kojiro

キーワード：教員研修，教師力，授業実践力，診断カルテ，資質・能力

1 はじめに

中央教育審議会から出された答申「新しい時代の義務教育を創造する」では、教育の重要性や学校の教育力向上の必要性を指摘する中で、喫緊の課題として教師の資質向上の必要性が提言されている。特に、第2章「教師に対する揺るぎない信頼を確立する－教師の質の向上－」では、あるべき教師像として三つの要素が示されている。

- ① 教師に対する強い情熱
- ② 教育の専門家としての確かな力量
- ③ 総合的な人間力

図1 優れた教師の条件

①は教師としての仕事に対する使命感や愛情、責任感、向上心など、情意面における要素を指している。②は教師として不可欠な能力、具体的には児童生徒の理解力、授業等における指導力、授業デザイン力、分析力、学級等の経営力、学校行事等の企画力など、教育のプロとして求められる力量のことである。③は児童生徒の人格形成や人生を左右する立場にある者として求められる豊かな人間性や社会性、教養などの獲得、望ましい人間関係の構築など、幅広い良識や資質・能力を備えた総合的な人間像のことである。

このように、教育のプロとしてバランスのとれた資質・能力を備えた教師像の追究こそが、児童生徒や保護者はもちろんのこと、広く社会から求められている命題であり、人々から尊敬され、揺るぎない信頼を獲得することが現在の教師に求められている必須の条件である。（文部科学省；中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」2005, 10）

くしくも答申の翌年度、鹿児島県では教職員の資質向上を目指して新たな評価システムが導入された。この折、筆者は離島の公立中学校において校長として関わり、教職員個々の目標設定や時宜折々の自己評価などにアドバイスを与えたり、授業実践や学級経営、校務分掌、保護者や地域との関わりなどを幅広くとらえ、教職員一人一人に応じた助言等を与えたりするなど、貴重な体験を得ることができた。しかしながら、授業参観一つにしても、授業を診断するための規準の設定やこれまでの指導に関する教職員個々の経歴等の情報把握が思うようには進まず、筆者の経験に基づくアドバイス等は実現できても、客観的な授業実践の診断や教職員個々の力の変容や伸び率などのとらえについては抽象的な示唆にとどまり、具体的かつ適切な助言ができたのかは確信が得られず、苦慮したことを覚えている。特に、授業実践の評価に関しては自分の専門教科以外の診断に苦戦したので、ぜひ現職教員の授業実践を客観的にとらえ、診断・支援することが可能な規準等を模索してみたいと意識したのもこの頃である。（文部科学省；教育行財政部会、資料6「教職員の研修体系の見直し」2009, 1）

一方、本学では平成21年度、独立行政法人教員研修センター「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」事業の採択を受け、鹿児島県教育委員会と協働して学校現場における教員研修の在り方の研究に取り組んだ。開発プログラムは『実践的な力量形成・自己開発を実現する教員研修モデルカリキュラム』の開発－教員のキャリアステージに応じた授業実践力評価の可視化を目指し

て-』と設定し、現職教員の実践的な力量形成に視点を当てた。ここでは、平成19年度に開発した課題焦点化型やビデオ検証型など、六つの授業研究のスタイル（鹿兒島大学教育学部；平成19年度同採択事業「成果報告書」2008, 3）を基盤に、インターバル研修の研究に取り組んだ。この研究は、開発した自己診断カルテを基に、教師がこれまでの授業実践を振り返り、改善点等を模索して指導法改善等に取り組み、模擬授業や研究授業の中で検証・改善していくという研修スタイルである。当然、「授業実践力診断カルテ」の作成に当たっては、まずは「授業実践力」を明確にとらえることが最初の課題として浮上したのである。この力の解明は、筆者にとって前職から持ち越してきた継続課題とも重なり、採択事業の基盤となる研究になった。（鹿兒島大学教育学部；平成21年度 独立行政法人教員研修センター「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」採択事業「成果報告書」2010, 2）

そこで、本稿では「授業実践力」を明らかにするとともに、授業実践力設定の根拠やそのとらえ方、開発の経緯などについて述べたい。また、自己診断カルテ活用の検証結果やその活用法についても言及することで、学校現場における現職教員の資質向上や教員研修の充実の一助としたい。

2 授業実践力の把握

(1) 直接的、間接的に働く力の二面性

授業実践力を模索するに当たり、当初、授業の中で必要とする力は、イメージとして授業実践の中に介在しているのではないかと考え、授業場面や学習指導案、発問、板書、教材・教具などを中心に検討・模索した。しかしながら、授業デザイン一つを取り上げても、授業実践だけでは修まらない。さらに、教育課程をはじめ、年間指導計画や単元計画などの計画段階から授業の実践、評価、改善に至るPDCAサイクルといった流れに至るまで着眼・吟味してみても、表面的な力は抽出することができても、授業実践の中で表出すると思われる基本的な力の本質に迫ることはできなかった。

そもそも現職の教員が、授業をはじめとする職

務に当たる際には、使命感や職責感、教育的な情熱、職務の重要性の認識など、個々の内面的な高まりに支えられながら教師としての力は研ぎ澄まされていく。（杉山正一著「教育力を磨く」霞出版社2004, 8）また、前述のとおり教師としてのプロ意識は、それを支える専門性や幅広い教養などを常に獲得しようとする意識が根底から働き、教師の質を高めている。

一方、教師は授業場面においても、かなりの部分において授業以外の側面に気を配っている。たとえば、生徒指導上の配慮による学習環境づくりや実験、野外活動時における安全面の配慮や危機管理、集団学習時における人間関係への配慮など、挙げればきりが無い。

さらに、授業以外の場面においても、そこで働く力は授業実践力と無関係であるとは言い難い。たとえば、保護者や地域との連携の場でも少なからず授業で培われた力が影響していると言えよう。また、学校・学級通信における授業の紹介、他校の教員間の情報交換や研修会などの参加の場などにおいても、間接的ではあるが授業実践と関連している。

このように授業実践の場においては、授業そのものに影響を与えて直接支えとなる力と、授業を根底から支え、基盤となったり、直接には関連しない内容や場面から関わることで、間接的に働いたりする力があるのではないかと推測した。しかしながら、これらの力のどこまでが現職の教員に求められる実践力で、どこからが授業に必要な実践力なのかを見極めることは難しい。

そこで、極めて遠回りではあったが、まずは現職の教員として必要な資質・能力を追究し、そこから教師に不可欠な授業実践力を見極めていくことにした。（木原、北野、佐野共著「現代学校教育高度化講座」第24巻、第3章「教師の職能成長と校内研修」学文社2010, 3）

(2) 現職教員に求められる資質・能力

授業をはじめとする現職教員の業務を、1年間や学期、月行事単位、1日の取組など、あらゆる側面から見直し、洗い出していくとともに、それらを「ア 基盤となる資質・能力」、「イ 指導に

係る能力」, 「ウ マネジメントに係る資質・能力」に分類した。そして、筆者が千葉大学教育学部で実施された調査研究を参考にしながらたたき台として構築したものを、本県の現職教員20人（小学校10, 中学校10）に見て頂き、加筆・修正や感想等を依頼し、「現職教員に求められる資質・能力一覧表」（資料1参照）を策定した。（平成19年度『教員養成GP「成果報告書」千葉大学教育学部2008, 3）

ア 基盤となる資質・能力

(ア) 人間性

本来、望ましい教師像の根底には、やりがいがあり、魅力にあふれ、希望に満ちた職業であるというポジティブな価値観が介在している。そのような発想に基づくならば、真っ先に使命感や職責感といった社会的要請に基づく観点が指摘できる。これは、児童生徒という存在を教育の中心に据えた価値観であり、まさしく教育の原点とも言えよう。つまり、教師としての基盤を形成する人間性というところのことである。（齋藤孝著「教師力」岩波新書2007, 1）

まず、人間性を中心に教師の力をとらえるとするならば、そこに介在するのは自己と他者、環境の三点である。教師という自己は、常に児童生徒の範（モデル）となるべく研鑽を怠ってはならない。これは自己の啓発でもある。また、教師たる者は他者との関係において自己中心的であったり、協調性に欠けてはならない。ここで求められる力とは、コミュニケーション能力（人間関係力）のことであろう。さらに、教師たる者、環境の中にあっては良識人でありたい。また、ルールやマナーを遵守し、情感にあふれる存在であってほしいと同時に、社会性豊かな存在でもありたい。

このように、人間性は教師を担う者にとってはその存在を根底から支える力なのである。

(イ) 教養

知識基盤社会の昨今、「生きる力」につながる思考力や判断力、表現力などといったキー・コンピテンシーを活かすことができる社会人としての一般教養を、また、人間教育に携わるプロとして

の魅力を醸成する専門教養、これらの二つを教師に必要な教養として身に付けておきたい。

このように、教養は日々のゆとりある言動を実現したり、人間性を高めたりするのに不可欠な基盤となる力なのである。

以上のようなとらえにより、「I 基盤となる資質・能力」は、「1 人間性」と「2 教養」の二項目に分け、「1 人間性」を「(1)社会性」、「(2)対人関係」、「(3)自己啓発」の三項目に細分化した。また、「教養」は「一般教養」と「専門教養」の二項目に細分化した。（資料1のI参照）

イ 指導に係る資質・能力

次に、指導に当たる際の資質能力に注目した。教師が現場で指導に当たるのは、授業場面だけとは限らない。教育活動のあらゆる場面において指導は存在している。また、指導場面においても直接的指導と間接的指導が考えられる。授業の準備段階から実践段階のイメージはもちろんのこと、日々の学校生活における指導場面をも想起しながら「実態把握（学習者理解）」、「分析」、「実践」の三観点で資質・能力をとらえた。（資料1のII参照）

(ア) 実態把握・学習者理解

授業等に欠かせない教師の活動として観察や検査、調査、情報収集などが挙げられる。学力の到達度やつまずき、悩み、健康状況、家庭状況の把握など、教師が観察・情報収集して把握しておかなければならないものは多岐に渡る。

(イ) 教科等理解・分析力

教材分析をはじめ、学習指導要領の把握や教育課程の編成・把握など、授業に備えるための大切な資質能力や知識・理解のことである。

(ウ) 指導力

授業を展開するに当たり、目標設定から授業デザイン、指導法改善、評価の工夫・改善など、最も中核となる構想力や実践力、展開力、評価力などの資質能力のことである。

以上のようなとらえにより、「Ⅱ指導に係る資質能力」は、「1実態把握・学習者理解」と「2教科等理解・分析力」、「3指導力」の三項目に分け、「3実態把握・学習者理解」を「(1)観察」、「(2)検査・調査」、「(3)情報収集、分析・理解、情報管理・共有・活用」の三項目に細分化した。

また、「2教科等理解・分析」は「(1)各教科等のカリキュラムに関する理解」と「(2)各教科における基盤的な知識の理解・技能の習得」の二つに細分化した。

さらに、「3指導力」は「(1)企画・立案力、構成力」と「(2)実践力、展開力、評価力」の二つに細分化した。(資料1のⅡ参照)

ウ マネジメントに係る資質・能力

三つ目の間接的資質能力として、学級運営や同僚とのチームワーク、学校間・家庭・地域社会等との連携、危機管理、会計処理などのマネジメントに関連した力を設定した。これらも、現職教員の資質能力としては重要な位置を占め、大きく影響している。

ここでは、「対人関係」、「環境・安全」、「事務処理・管理」の三点に絞ってとらえた。

(ア) 対人関係能力

学校は教職員からなる組織体であるが、組織内における立場の理解やサービスの適正な取組などは、組織を維持する運営力は不可欠である。また、個々の研修は重要だが、そこには限界があることも事実で、組織的な校内研修等で発揮され、習得される研修力は欠かせない。また、日頃から同僚等との情報交換をはじめ、教師間相互の学びの重要性など、連携する力も欠かすことはできない。

(イ) 環境・安全対処力

授業にとっては間接的な力だが、教室をはじめとする施設や環境の改善意識は、生命尊重の観点からもきわめて重要な力であると言えよう。また、日頃から安全管理等に備える力や突発的な事故、事件などに対して適切に対応する力、つまり、危機管理能力も欠かすことはできない。

このように、環境の改善やそれを活用する力、危機管理能力の二点をまとめ、「環境・安全対処力」ととらえた。

(ウ) 事務処理・管理能力

教師にとって事務処理能力や事務管理能力は、学校業務に不可欠な要素と言える。

まず計画的・継続的な力が求められる情報記録の整理・保管。しかも、これらの事務処理には正確さと迅速な処理能力が要求される。いかに丁寧で正確であっても、時間がかかっては意味がない。その逆も、また然りである。

そこで、これらの力を「情報記録管理能力」ととらえた。

二つ目に施設や物品の管理が挙げられる。学校内の教育施設や備品などの貴重な財産の計画的・継続的な点検を実施したり、保全・管理を継続したりする力は欠かせない。

そこで、これらの力を「施設・物品管理能力」ととらえた。

三つ目に金銭の管理や処理に関する力が挙げられる。学校内での金銭等の盗難や紛失などの事故・事件等は、生徒指導上も大きな課題となる。適切・正確な会計処理や確実な金銭等の管理は、教師にとって不可欠な力である。

そこで、これらの力を「会計処理能力」ととらえた。

以上のようなとらえにより、「Ⅲマネジメントに係る資質能力」は、「1対人関係能力」と「2環境・安全対処力」、「3事務処理・管理能力」の三項目に分け、「1対人関係能力」を「(1)運営力」、「(2)研修力」、「(3)協働力」、「(4)連携力」の四項目に細分化した。

また、「2環境安全対処力」は「(1)環境改善・活用力」と「(2)危機管理能力」の二つに細分化した。

さらに、「3事務処理能力・管理能力」は「(1)情報記録管理能力」と「(2)施設・物品管理能力」、「(3)会計処理能力」の三つに細分化した。(資料1のⅢ参照)

(3) 授業実践力への焦点化

現職教員の資質・能力の全体像を振り返ったことで、授業実践力の見極めが可能となった。

見極めの手順としては、まず「現職教員に求められる資質能力」を基に、授業の実践に直接関連するエリア、間接的に関連するエリアを厳選してとらえる作業に取り組んだ。(資料2参照)

ア 授業実践を根底から支える資質・能力

「現職教員に求められる資質能力」の分析と同様、授業実践力も授業の場だけが関連するエリアではなく、間接的に関連するエリアが存在すると考えた。また、教師の内面を高めたり、鼓舞したりする力も、授業実践力には不可欠であると考えた。

そこで、「Ⅰ 授業実践を根底から支える資質能力」を「Ⅰ 情意エリア」と「Ⅱ 研鑽エリア」の二つに分類した。(資料2のⅠを参照)

(ア) 情意エリア

授業場面を想定し、「現職教員に求められる資質能力」の「Ⅰ 人間性」からは「(1)社会性」の「エ使命感や職責感」、「(3)自己啓発」の「ウ教育的情熱」が授業に臨む際、不可欠の意欲や情熱であるにとらえた。また、「Ⅱ 教養」についても、一般教養、専門教養の区別なく、まんべんなく習得しようとする飽くなき学びの姿勢が必要であるにとらえた。

そこで、「Ⅰ 情意エリア」は「(1)使命感の堅持」、「(2)教育的情熱の高揚」、「(3)研修の重視」の三観点に分類した。

(イ) 研鑽エリア

「(1)知性や感性」、「(2)社会性」、「(3)広い教養」、「(4)自己啓発」などは、1、2回研修したからといって簡単に獲得できる力ではない。繰り返し継続してこそ、初めて獲得することができる力である。

そこで、これらの力を「Ⅱ 研鑽エリア」ととらえた。

イ 授業実践の中核を支える資質・能力

「Ⅱ 授業実践の中核を支える資質・能力」においては、授業に対して直接的に関連したり、支えたりしているエリアを、「Ⅰ 状況把握エリア」と

「Ⅱ 理解・分析エリア」、「Ⅲ 指導エリア」の三つに分類した。そして、授業デザインや授業の実践の場を想定し、具体的な取組を確認しながら、不可欠な要素を洗い出した。(資料2のⅡを参照)

(ア) 状況把握エリア

授業デザインに取り組むに当たっては、学校経営の方針はもちろんのこと、地域の「(1)ミッションの把握」をはじめ、「(2)家庭状況や地域情報の獲得」、「(3)学校や学年、学級の様子把握」、「(4)子どもの様子把握」まで、幅広く情報を収集し、迅速な対応が求められている。これらの情報の把握と分析こそが、指導法改善の糸口となる。

そこで、これらを「Ⅰ 状況把握エリア」ととらえた。

(イ) 理解・分析エリア

教師は子どもたちの学習状況や到達度など、細かな学力検査や適性検査など、「(1)諸調査データ分析」を引き継ぎ、個々の変容をとらえている。また、授業中や授業以外の場面においても、係活動や部活動などの「(2)観察データ等の分析」を指導に活かしている。さらに、学習指導要領等の確認など、「(3)ビジョンの反映」にもよく配慮し、指導等に活かしている。

これらの情報把握の一方で、教師は「(4)教材分析」に取り組む。教育課程等の指針に沿って、子どもの実態等に応じた教材分析の充実や指導目標の設定などに工夫している。

そこで、これらの授業を支える事前準備や指導内容などの情報把握・分析を中心に取り組む一群を「Ⅱ 理解・分析エリア」ととらえた。

(ウ) 指導エリア

教師の一番の仕事ともいえる授業を中心にとらえたエリアである。ここでは、授業デザインや授業実践時における取組方や展開などを、特に時系列に沿った形でとらえた。

準備段階となる「(1)授業のデザイン」をはじめ、評価情報を基に指導法の工夫に取り組む「(2)授業の実践」や子どもたちの学習状況を中心にモニターし、学習の習得状況やつまづきの傾向など

を客観的に把握し、指導法の改善につなぐ「(3)授業の評価」活動、学習の達成状況を把握し、記録・分析に取り組む「(4)授業の分析」、それらの評価や分析を基に取り組む「(5)授業の改善」など、一連の授業の流れを「3 指導エリア」ととらえた。

ウ 授業実践のマネジメントに係る資質・能力

学校は、児童生徒の育成を目途に教師等複数の担当が協働で管理等に取り組む組織体である。

そこで、学校という組織体の中で、授業を中心に管理・運営に関わる資質・能力を「Ⅲ 授業実践のマネジメントに係る資質・能力」ととらえ、その内容分析に取り組んだ。(資料2のⅢを参照)

(ア) メタ評価エリア

授業は、授業プランの企画からスタートし、実践、評価、改善と巡っていく。つまり、PDCAサイクルによって、企画・実践した内容を、客観的かつ適切に「(1)授業実践の評価・改善」していくというマネジメントの上に成り立っている。また、教室をはじめとする学習環境も同様の工夫・改善がなされている。望ましい「(2)授業環境の改善・活用」は、(1)と表裏一体の関係にあり、望ましい授業環境が確立されてこそ、スムーズな授業実践が展開されるのである。

さらに、健康・安全管理の面からとらえると、事故・事件は起こらなくて当たり前であり、日常からの安全対策や「(3)危機管理」などは、最重要課題とも言える。また、子どもたちを取り巻く環境の中の「(4)情報処理」にも落とし穴が潜んでいる。

以上、四つの管理項目は日頃から当然のこととして培っておかなければならない重要な評価項目である。そこで、これらの四点を「1 メタ評価エリア」ととらえた。

(イ) コミュニケーションエリア

前述のとおり、学校とは複数の人々とのかわり成り立っている集合体であり、組織体である。教員は同僚職員と情報や意見を交換したり、アドバイスをしたりするなど、協働で相互の研鑽に取り組んでいる。また、人とのかわり成りは同僚だけでなく、保護者や地域住民、他校の教員など、幅

広く付き合っていかなければならない。もちろん、コミュニケーションの重点は子どもたちとのかかわりであり、学習指導に取り組むに当たっては、個々の学習の進捗状況に応じた支援体制を確立することが肝要である。

このように様々な人々とのコミュニケーションを円滑に運ぶために、役割分担、つまり校務分掌を構築し、職員間の意見や情報の交換に取り組んでいる。

以上、「(1)協働の活性化」や「(2)連携の充実」、「(3)個に応じた支援体制の確立」、「(4)分掌の充実」の関係する人々相互のかかわりに着目した内容等を「2 コミュニケーションエリア」ととらえた。

3 授業実践力診断カルテの作成と検証

(1) 開発した診断カルテの特徴と課題

今回、開発した授業実践力診断カルテは、すべての教科・領域に関連する資質・能力を対象として開発してきた。授業のみに関連する具体的な活動や状況などに特化してとらえてしまうと、イメージそのものはとらえやすくなるかもしれないが、診断する範囲が限定されてしまい、小手先の工夫・改善ばかりが優先され、本質的な力を見逃してしまうことが危惧される。ゆえに、あえて教科等に特化せず、広いエリアでとらえることが肝要であると考え、今回のような提言となった。授業に直接的に関連するエリアと、間接的に関連するエリアが生じたのは、このようなとらえ方に由来している。

しかしながら、採択事業における実践や検証によって改善点が見えてきた。まず、間接的なエリアにおける診断カルテの活用は、あくまでも最初と最後に取り組み、その変容をとらえることが望ましい。また、授業デザインや模擬授業、研究授業などに取り組んでいる場面では、授業担当者は実践したことについて形成的評価に取り組んでいるので、間接的なエリアの診断は実用的でない。

さらに、すべての教科・領域に渡ってとらえた授業実践力は、教科レベルでの実践時においてはやや曖昧で抽象的な力のとらえとなってしまった。したがって、授業実践の中で取り組んだバラ

ンスや価値を客観的にとらえることについてはその効果を確認することはできたが、細かい分析の在り方や指導法の改善などの細かい点については、教科レベルにおける授業実践力のとらえをさらに細分化し、それに基づいた診断カルテ等を作成して取り組むことが不可欠である。

これらのことが今後の一番の解決しなければならない課題である。

(2) 診断カルテで可視化される評価活動

ア 授業担当者の創意工夫

授業担当者は、まず自己を振り返り、授業実践力診断カルテを基に「診断的評価」に取り組む。ここでは、これまでの教師としての活動履歴等を振り返ることで、自己の足跡を再認識する。次に、今後の取組方や目指す教師像などについて確認する。さらに、学習指導に直接的にかかわるエリアと、間接的にかかわるエリアについて診断し、最後に結果を客観的にとらえ、自己の長所や短所、現時点における課題等を把握するに至るのである。

そして、授業担当者は診断的評価で獲得した結果を基に、授業デザイン(Plan)に取り組む。次に、模擬授業でそれらを実践(Do)し、児童生徒役の同僚と批評し合い、課題等を模索する(Check)。それらの課題等を修正した上で、再度、模擬授業にチャレンジしたり、研究授業に臨んだりする(Action)。

つまり、授業担当者は診断から模擬授業、模擬授業から研究授業へと取り組む過程でPDCAサイクルに従って「形成的評価」を繰り返しているのである。

さらに、授業担当者は形成的評価を繰り返しながら指導法改善に取り組み、最後に再び診断カルテを活用して自己診断に取り組む。この際の自己診断は、「総括的評価」と言えよう。授業担当者は、冒頭の診断的評価から幾度かの形成的評価を経て総括的評価に至る。

これらの三つの評価活動を客観的にとらえて分析することで、授業実践力の変遷を把握することができ、授業担当者としての変容を確認(可視化)することができる考えた。

今回、授業実践力診断カルテでは、インターバル研修の診断結果をレーダーチャートに記載して可視化できるように工夫したが、これはあくまでも診断結果の数値化が可能なデータをレーダーチャートとして可視化したにすぎない。これらのデータは、さらなる可視化のための手掛かりとなるように工夫したものであり、授業実践力評価の一部に過ぎないことを付け加えておきたい。

では、どこの評価活動で可視化が可能となるのか。それは、授業担当者がPDCAサイクルで形成的評価を繰り返していると同時に、一方でその姿を客観的にとらえながらアドバイス等を返している協力者の支援活動とのかかわりの中からとらえることができると考えた。つまり、この両者相互のかかわりは、まさしく互いの評価活動を支援し合っている姿であり、授業担当者と協力者が協働して批評し合った姿をモニターした足跡こそが、授業実践力の評価が可視化された場面であると言えよう。

イ 協力者(同僚等)の支援活動

授業実践力評価の可視化について、協力者の側からとらえてみたい。

校内研修等で授業実践力診断カルテを扱う場合、同僚等と共に活用することが望ましいことが検証からとらえられた。授業担当者と共に診断的評価に取り組み、診断結果を共有することで、協力者との相違点が明らかになるとともに、協力者は支援活動のポイントをとらえることができる。

次に、PDCAサイクルに基づいて形成的評価に取り組んでいる授業担当者を支援する協力者は、授業担当者の評価活動と並行しながら総括的評価を展開している。ここでのポイントは、協力者は授業担当者がPDCAサイクルに基づきながら評価活動に取り組んでいるということを常に認識しながら客観的にとらえなければならないということである。

つまり、授業担当者を支援するまわりの協力者たちは、診断的評価と総括的評価の二つの評価活動に取り組む、授業担当者が形成的評価に取り組んでいる際は、授業担当者の評価の前後の変容を総括的にとらえ、評価結果を返すことで、客観的

的確な支援が実現されているのである。そして、この場面こそが授業実践力の評価が可視化された瞬間と言える。また、両者の評価活動の関係は相互の立場が逆転した際にも活かされ、望ましい相互の支援活動が展開され、相互の可視化はさらに明確になると期待できる。

4 授業実践力診断カルテの活用例

ここでは、共に教職歴16年目となる37歳の女性で、同時期に国語科の授業改善に取り組んだ小学校A教諭と中学校B教諭の二例を紹介しながら診断カルテの活用を検証してみたい。

A教諭は初任校が900人の大規模校、2・3校目が300人の中規模校、現任校の4校目が初めての小規模校で、約50人の複式学級を抱える小学校である。現在、6年生の担任と教務主任、国語科主任を兼任し、学校の中心となって活躍している。

B教諭は現任校が3校目で、初任校と同様に約300人の中規模校だが、2校目では約700人の大規模校も経験している。現在、3年生の副担任をしながら国語科主任と保健主任、進路指導主任を兼任し、学校の中堅教員として活躍している。

(1) 振り返りの効果

診断カルテの冒頭では、教員となる志望動機と現在の思いを確認している。(資料2のⅠ～Ⅱ参照)

< A教諭 >

【志望動機】

- ・小学校時代に出会った先生の影響で、厳しいが愛情あふれる人だった。教育実習で教職の素晴らしさを実感したことが決め手となった。

【現在の気持ち】

- ・今もその気持ちに変わりはない。しかし、何度も壁にぶつかる中で、同僚・先輩の存在に感謝するとともに、子どもたちから力をもらったと感謝している。
- ・目の前の子もだけでなく、将来の成長した姿をイメージしながら教育にかかわることが大事だと思う。

< B教諭 >

【志望動機】

- ・小学校の頃から、子どもに携わる仕事がしたかった。
- ・国語の美しさを伝えたいと思って、国語科を選んだ。

【現在の気持ち】

- ・変わらない。しかし、子どもたちが将来、どんな大人になるのかということを考えながら接するようになった。

図2 フレッシュ・フィードバック (教師の振り返り①)

志望動機を確認することで、初心として抱いていた教員に対する情熱や意欲が喚起されるとともに、改めて教職の重要性を再認識することが期待できる。くしくもこの二人は校種が異なるものの、共同で授業デザインや模擬授業等の改善に取り組み、志望動機が小学校に至ったことや現在の心境として長期的に子どもの成長をイメージし、取り組むことの重要性の認識が一致したことで、共感を覚え、相互の距離が一気に縮まり、助言等が活性化している。

また、「Ⅲこれまでの授業実践」(資料2のⅢを参照)では、これまでの授業実践における工夫・改善を細かく振り返るとともに、成果や課題を診断している。

< A教諭 >

【これまでの授業実践】

- ・教材開発や習熟度別指導、基礎・基本の明確化、スピーチやメモ、3領域のバランスのとれた指導の工夫等

【今後の課題】

- ・研究授業や授業研究の更なる充実
- ・日常の授業実践の見直しやきめ細かい評価の工夫

< B教諭 >

- ・イメージ化の重視 (作者が登場人物に寄り添うということの繰り返し指導)
- ・視覚的な文法学習や古文や韻文のイメージ化における絵を描かせる指導の工夫
- ・家庭学習の工夫や国語嫌いの生徒の解消

【今後の課題】

- ・緊張感漂う国語科授業の実現
- ・思考の伴う表現力の更なる工夫
- ・ゆとりある授業の実現

図3 これまでの授業実践（教師の振り返り②）

日々の慌ただしさに追われる毎日、教員研修に取り組むに当たっても、じっくりとこれまでの研究成果や課題を振り返る機会はない。今回、このように時間をかけ、丁寧に志望動機からこれまでの研究成果を振り返ることについて、両教諭ともいい機会であったと感想を述べている。

このことは、各エリアの診断や特記事項の記載、自己診断結果の確認（自由記述のカルテメモ）などにも影響している。

< A教諭 >

- ・自己啓発については、必要性は認識しているが不十分である。（Ⅰ「2 研鑽エリア」, 「(4) 自己啓発」の特記事項から = 評価2）
- ・個々の情報についての整理はできていない。（Ⅱ「1 状況把握エリア」 「(4)子どもの様子の把握」の特記事項から = 評価2）
- ・初めてこのような自己診断を行い、自分の教員生活を振り返るよい機会となった。教員を目指した理由などをまとめながら、当時の気持ちを思い出し、改めて身の引き締まる思いがした。（中略）この自己評価を通して、自分をもっと努力する点や改めて見つめ直していかなければならない点が見えてきた。（以下略, 「自由記述のカルテメモ」から）

< B教諭 >

- ・学習指導要領の重要性については認識しているはずなのに、その内容はあまり分かっていない。（Ⅱ「1 状況把握エリア」 「(1) ミッションの把握」 = 評価2）
- ・生徒に教える身として、また一人の人間として学びたい、知性を磨いて感性を豊かにしたいという思いは強くもっているが、それが時間的な制約や物理的な問題のために、授業実践に結びついていないということに気付いた。（以下略, 「自由記述のカルテメモ」から）

図4 特記事項等の自由記述（一部抜粋）

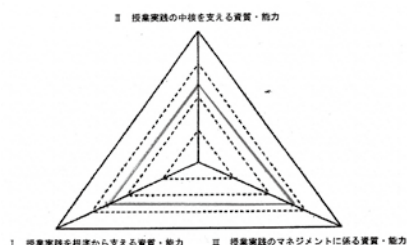
このように、授業を主体とした研修に取り組む際には、丁寧に順序立てて自己診断することによって、的確に評価できていることが分かる。ま

た、傾向として評価2という課題となる点に関する自由記述が大半ではあるが、丁寧に順序立てて診断したことで、各エリアでの気付き（学習指導要領や日々の取組方など）も増えていることが分かる。このことは、繰り返し自己診断に取り組み、慣れることで、長所の気付きや変容、改善点などに関する自由記述等も増えると期待できる。

(2) 自己診断結果の確認

今回の取組では、診断結果をレーダーチャートに記載することで、診断結果を視覚的にとらえた。前述のとおり授業実践力の可視化は、自由記述や特記事項の中にその多くのヒントが隠されているが、レーダーチャートによる表記と加味してとらえると、その変容がよくとらえられる。

< A教諭・授業実践力（全体）のバランス >



< B教諭・授業実践力（全体）のバランス >

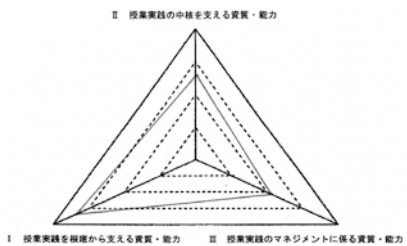
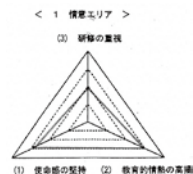


図5 授業実践力（全体）のバランス

< A教諭 >



< B教諭 >



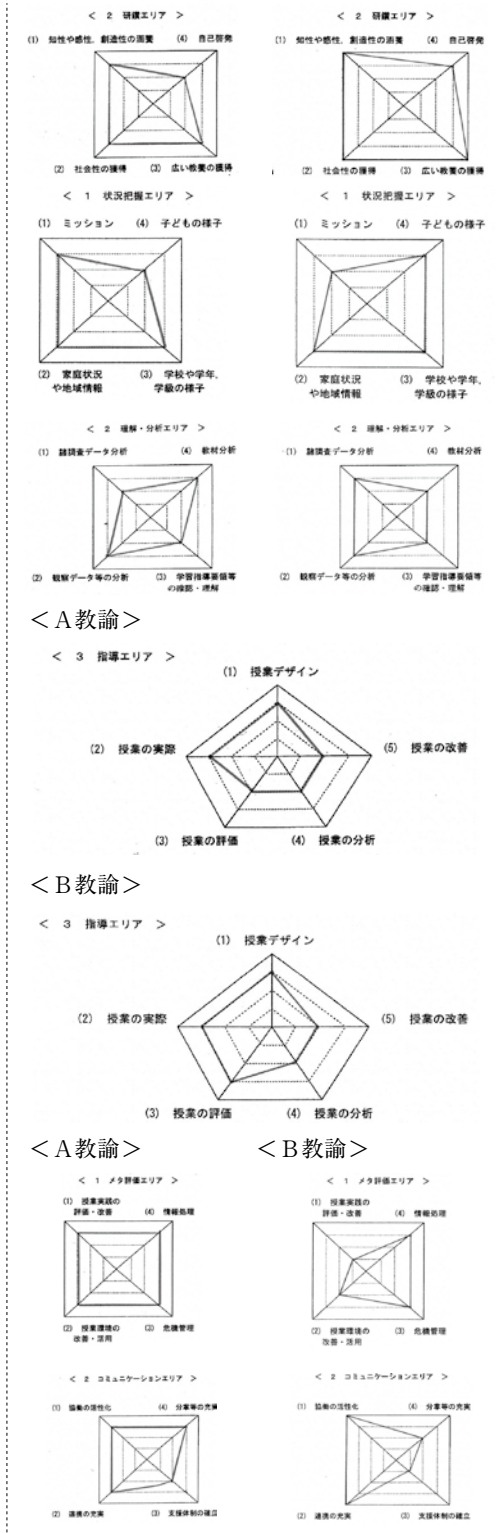


図6 各エリアごとの診断結果

授業実践力の全体的なバランスを見ると、間接的な部分ではB教諭の方が「Ⅰ授業実践力根底から支える資質・能力」では高く、「Ⅲ授業実践のマネジメントに係る資質・能力」では低くなっているが(図5参照)、エリアごとに見ると、時事項の記述にも見られたとおり、A教諭の「(3)研修重視」と「(4)自己啓発」が低い。一方、B教諭は「1メタ評価エリア」では「(3)危機管理」、「2コミュニケーションエリア」では、「(3)支援体制の確立」が低くなっている。これだけのとらえでも、授業を構築するに当たって、間接的に何を改善しなければならないかは明らかである。

では、直接的にかかわる「3指導エリア」はどうかであろうか。「(3)授業の評価」に若干の差異が生じているが、結論としては両者の自己診断はほぼ似通った結果となっている。

校種の違いはあるものの、同年齢で共に学校の中核として活躍している中堅教員だが、この診断結果を共有して協働で指導法改善に取り組む教員研修であるというところに意義がある。これまで授業を主体とした校内研修では、授業担当者の負担が極めて大きく、とても孤独な存在であった。今回、同じ診断カルテで共に真摯に自己診断に取り組む、その結果を共有したことで、相手だけではなく、自己の現在の立ち位置や長所・短所、改善点などを客観的にとらえ、共に励まし合いながら指導法改善に取り組み始めたところに意義がある。この後、両者は開発中の「国語科授業研究支援シート」を基に授業デザインに取り組んだ。今後、模擬授業、研究授業へと実践に向けて協働で研究に取り組んでいる。教科レベルのより具体的な観点で相互にチェックしている。それは、これまでのような一人で抱え込んで産みの苦しみに悩まされるといった教員研修ではない。まさしく、共同で取り組む新しい形態の教員研修である。最終段階で再び自己診断に取り組む、結果を検証・分析して診断カルテの改善を図りたい。(資料2のV参照)

6 終わりに

今回、はじめて全教科・領域に渡る授業実践力診断カルテの開発に取り組んだが、この開発が契

機となり、前述のとおり、現在、各教科では授業実践力の診断項目を各教科レベルに合わせたものを、「授業研究支援シート」と名付け、追究・開発に取り組んでいる。このシートは授業を主体とした研究授業や模擬授業などの参観や授業研究の際に活用する。

今回、開発した授業実践力診断カルテを最初と最後に診断的な自己評価として活用し、その結果を基に授業デザインや指導法改善に着手する。そして、模擬授業や研究授業などの検証途中では、授業研究支援シートを活用して授業研究の活性化、強いては校内研修の充実につながると期待される。ただ、診断カルテと支援シートの二つが学校現場において気軽に活用されるようになるためには、両者とも汎用化に向けてさらに改善したい。また、インターバル研修の中で、複数回、自己診断を繰り返すことで自己の変容の変遷がモニターできるわけだが、今回の検証の中で指導法改善に取り組む過程で、自己の評価規準も成長することが分かった。場合によっては、個々の評価規準のレベルが上がり、授業実践の成果が上がった一方で、自己評価は下がるといった逆転現象も起こりかねない。今後、自己診断カルテの活用や評価の在り方についても今後の課題として研究に取り組みたい。

引用・参考文献

- 1：中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」文部科学省 2005, 10
- 2：教育行財政部会、資料6「教職員の研修体系の見直し」文部科学省 2009, 1
- 3：杉山正一著「教育力を磨く」霞出版社 2004, 8
- 4：木原、北野、佐野共著「現代学校教育高度化講座」第24巻、第3章「教師の職能成長と校内研修」学文社2010, 3
- 5：齋藤 孝 著 「教師力」岩波新書 2007, 1
- 6：読売新聞社取材班著「教育ルネッサンス教師力」中央公論新書 2006, 7
- 7：パッカラ・リッカ著（小林礼子訳）「フィンランドの教育力」第5章「教師はマルチ・タレントでなくっちゃ」学研新書 2008, 11
- 8：平成19年度 教員養成GP「成果報告書」千葉大学教育学部 2008, 3
- 9：平成21年度 独立行政法人教員研修センター「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」採択事業「成果報告書」鹿児島大学教育学部 2009, 3
- 10：平成19年度 独立行政法人教員研修センター「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」採択事業「成果報告書」鹿児島大学教育学部 2008, 3

資料1

現職教員に求められる資質・能力一覧表

資質能力に係る項目		内 容	
I 基盤となる資質能力	1 人間性	(1) 社会性 ※ 社会的要請	ア ルールへの遵守, マナーの獲得 (遵法精神)
			イ 人権・福祉感覚, 教育的愛情の涵養
			ウ 知性, 感性, 創造性の獲得
			エ 強い使命感, 職責感, 責任感の涵養
			オ 倫理観, 道徳観の獲得
		(2) 対人関係	ア 協調性の涵養
			イ 一体感の獲得
			ウ リーダー性の育成
		(3) 自己啓発	ア 課題発見能力の育成
	イ PDCAサイクルの獲得や自己改善力の育成		
	ウ 教育的情熱の高揚・鼓舞, 意欲化		
	2 教養	(1) 一般教養	ア 一般的知識, 雑学の獲得 (情報収集力育成)
			イ 趣味やゆとりの保持, 見通しの拡大
			ウ 社会観, 社会対応力の獲得
エ 体験知 (探求心の涵養), 経験値の蓄積			
オ 飽くなき追究			
(2) 専門教養		ア 教職の意義に関する理解	
		イ 教育理念の理解	
		ウ 教育方法に関する理解	
		エ 専門的知識の獲得	
		カ サービス規律の厳正確保	
II 指導に係る資質能力	1 実態把握 ・学習者理解	(1) 観察	ア 学力の到達度把握
			イ ものの見方や考え方の把握
			ウ つまづきの把握
			エ 悩みや欲求の把握
			オ 健康状況の観察や発達程度・体力の把握
			カ 家庭状況の把握
		(2) 検査・調査	ア 学力等の検査
			イ 学校, 学年, 学級経営に係る意識等の調査
			ウ 問題行動等, 生徒指導に係る実態調査
			エ 健康・体力調査
			オ 家庭状況調査
			カ 同僚間の意識調査, 評価把握
	(3) 情報収集, 分析 ・理解, 情報管理 ・共有・活用	ア 学校生活や活動の観察	
		イ 生活記録等の点検業務	
		ウ 同僚や保護者, 地域等情報提供	
		エ 人間関係や心理・発達面に関する情報	
		オ カウンセリングや教育相談に関する理解	
		カ 特別支援教育に関する理解	
2 教科等理	(1) 各教科等のカリ	ア 学習指導要領等の把握	
		キ 地域実態の把握	

II 指導に係る資質能力	解・分析力	キュラムに関する理解	イ 教育課程の編成とその理解
			ウ 各教科等に係る全体計画等の整備と共有
		(2) 各教科における基盤的な知識の理解・技能の習得	ア 各教科における教材分析
			イ 各教科における関連教材の発掘と分析
			ウ 各教科における関連教具の開発
			エ 各教科における基盤的な知識・技能の整理
	オ 道徳や特別活動，総合的な学習の時間など，教科以外の教育活動に関する基礎的な知識・技能の獲得		
	3 指導力	(1) 企画・立案力，構想力	ア 学校教育目標や学年，学級経営目標の立案
			イ 各経営目標の策定に係る同僚との協働・連携
			ウ 実態把握や教材分析を反映した授業デザイン
			エ 実態把握や教材分析を基にした評価や発問，板書，教具準備計画などの創意工夫
		(2) 実践力，展開力，評価力	ア 教育技術や教育評価の理解
イ 教育技術や教育評価を基にした授業実践			
ウ 個人や集団の適切な把握に基づく実態に応じた指導			
エ 個に応じたカウンセリングやガイダンス			
オ 各教科等の目標やねらいに応じた指導の工夫			
カ 効果的な指導のための創意工夫			
キ 評価情報等を基にした授業の評価・改善			
III マネジメントに係る資質能力	1 対人関係能力	(1) 運営力	ア 組織内における立場の理解
			イ 組織活動の活性化
			ウ サービスの適性化
		(2) 研修力	ア 校内研修の推進と日常での活用
			イ 教科等における地域研修・研究の推進
			ウ 研修活動の活性化による説明責任の確立
		(3) 協働力	ア 学校，学年，教科間などにおける情報交換と意見交換の活性化
			イ 同僚相互のリーダー性の発揮と学びの確立
			ウ 学校行事等の協働による創意工夫と活性化
		(4) 連携力	ア 保護者との連携・協力体制の確立
			イ 地域・団体等との連携協力の確立
			ウ 開かれた学校づくりの推進のための学校間連携体制の確立
	2 環境・安全対処力	(1) 環境改善・活用能力	ア 環境改善に対する意識の高揚と対処の充実
			イ 教室や学校施設の機能的な整理と有効利用
			ウ 地域環境への働き掛けや有効活用
		(2) 危機管理能力	ア 事故や災害に対する対処能力の育成
			イ 事故や災害に対する予防・管理体制の確立
			ウ 事故や災害に対処するマニュアルの確立
3 事務処理・管理能力	(1) 情報記録管理能力	ア 意図的・計画的な記録と整理保管	
		イ 文書事務の正確・迅速な処理	
	(2) 施設・物品管理能力	ア 教育施設や財産の計画的・継続的な点検と適切管理	
		イ 教育施設や財産の有効活用	
	(3) 会計処理能力	ア 適切・正確な会計処理	
		イ 確実な金銭等の管理	

資料2

平成21年度

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム（独立行政法人教員研修センター）採択事業

授業実践力診断カルテ



【診断履歴】

第1回目 平成21年 月 日 () 「 」 (於 ;)
第2回目 平成21年 月 日 () 「 」 (於 ;)

学 校 名

	学 校
--	-----

氏 名

--

鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター

I フレッシュ・フィードバック

<p><input type="checkbox"/> 小学校（中学校）の教員を目指した理由（志望動機等）を振り返りましょう。</p> <p><input type="checkbox"/> 今もその気持ちに変わりはありませんか？現在の考えや思いを確認しましょう。</p>
--

II キャリアの確認（赴任校、子どもの数、担当等）

No	学 校 名	子どもの数 (学校規模)	担任等	教科等	分掌等	その他
1		()				
2		()				
3		()				
4		()				
5		()				

※ 一般企業，非常勤講師，期限付き等の経歴

--

Ⅲ これまでの授業実践

<input type="checkbox"/> これまでの授業で取り組んだ独自の工夫や改善策などを書きましょう。
<input type="checkbox"/> これまでの授業実践を振り返り、成果等を書きましょう。
<input type="checkbox"/> これまでの授業実践を振り返り、課題等を書きましょう。

Ⅳ－① 自己診断【これまでの授業実践の振り返り】

		授業実践力に係る項目 / ライフステージ	自己診断及び特記事項					
Ⅰ	授業実践を根底から支える資質・能力	1 情意エリア	(1) 使命感の堅持 学力の保証等や質の高い授業の提供について使命感や職責感、責任感を堅持している。	1	2	3	4	
			(2) 教育的情熱の高揚 子どもたちの存在を中心に据え、情熱的・意欲的に授業設計や実践に取り組み、還元したいと意識して取り組んでいる。	1	2	3	4	
		2 研鑽エリア	(3) 研修の重視 質の高い授業の提供を実現するため、研修の重要性を認識するとともに、常に学ぶ姿勢を堅持している。	1	2	3	4	
			「Ⅰ－1 情意エリア」(平均)	/ 1 2 ()				
	Ⅱ	1 状況把握の中核を支える資質・能力	(1) 知性や感性、創造性の涵養 知性を磨き、感性や創造性を豊かにすることが、授業実践には必要であると認識している。	1	2	3	4	
				(2) 社会性の獲得 ルールの遵守、マナーや人権・福祉感覚の獲得など、社会的な良識を身に付け、授業に臨むことが必要であると認識している。	1	2	3	4
			2 研鑽エリア	(3) 広い教養の獲得 子どもたちの範となる授業を提供するため、広く一般や専門の教養を身に付けることが必要であると認識している。	1	2	3	4
				(4) 自己啓発 課題の発見やPDC Aサイクルの獲得、自己改善などに取り組もうとしている。	1	2	3	4
		「Ⅰ－2 研鑽エリア」(平均)		/ 1 6 ()				
		「Ⅰ 授業実践を根底から支える資質・能力」(平均)		/ 2 8 ()				
Ⅱ	1 状況把握の中核を支える資質・能力	(1) ミッションの把握 学習指導要領等の把握や教育課程の理解、全体計画の整備、学校評価の課題、保護者・地域の願いなどをとらえている。	1	2	3	4		
			(2) 家庭状況や地域情報の獲得 家庭環境や本人・保護者の希望、生育歴、地域性など、子どもを取り巻く環境の情報等をとらえている。	1	2	3	4	
		(3) 学校や学年、学級の様子の把握 学校や学年の目標、学級内の人間関係や個々の特性など、集団の実態把握に関する情報をとらえている。	1	2	3	4		
		(4) 子どもの様子の把握 子ども一人ひとりの様子や可能性、個性、長所・短所などの個々の情報をとらえている。	1	2	3	4		
		「Ⅱ－1 把握エリア」(平均)		/ 1 6 ()				
	2 理解・分析エリア	(1) 諸調査データ分析 学力や適性検査など、様々な調査データを引き継ぎ、個々の変容や可能性などの情報等をとらえている。	1	2	3	4		
			(2) 観察データ等の分析 日常の学校・学級内における生活や係活動、部活動などの様子を観察・分析して指導等に活用をしている。	1	2	3	4	
		3 分析エリア	(3) ビジョンの反映 学習指導要領等を把握・理解し、教育課程の編成やそれぞれの計画、指導などに活かそうとしている。	1	2	3	4	
			(4) 教材分析	1	2	3	4	

II	ア	教育課程等を踏まえ、子どもの実態に応じた教材の分析や指導目標の設定などに取り組んでいる。		
		「II-2 理解・分析エリア」(平均)	/ 16 ()	
	授業実践の中核を支える資質・能力	3	(1) 授業のデザイン 指導目標や子どもの学習状況、興味・関心などの実態を踏まえ、指導計画や学習指導案などを作成している。	1 2 3 4
			(2) 授業の実際 指導計画や進捗状況、発達段階、子どもたちの達成度や学習の様子などを踏まえ、指導方法の工夫に取り組んでいる。	1 2 3 4
		指導エリア	(3) 授業の評価 子どもたちの学習への意欲や態度、能力、知識・技能などの習得状況やつまずきの傾向、こどものよさなどを客観的に把握し、指導方法の改善につながる評価データを収集・蓄積している。	1 2 3 4
			(4) 授業の分析 子どもたちの学習や達成の状況などを的確に把握し、記録・分析に取り組んでいる。	1 2 3 4
		ア	(5) 授業の改善 質の高い授業の提供を目指し、評価データや分析結果などを活かしながら指導法の工夫・改善に取り組んでいる。	1 2 3 4
			「II-3 指導エリア」(平均)	/ 20 ()
		「II 授業実践の中核を支える資質・能力」(平均)		/ 52 ()
		III	1	(1) 授業実践の評価・改善 PDCAサイクルを獲得することで、客観的かつ適切な評価を下し、自己の改善につなげている。
(2) 授業環境の改善・活用 子どもたちを取り巻く授業環境の工夫・改善に取り組むとともに、整備された環境を活かした授業実践に取り組んでいる。	1 2 3 4			
(3) 危機管理 常日頃から安全対策等を講じ、子どもたちを取り巻く状況の変容等に配慮するなど、危機管理を意識して実践している。	1 2 3 4			
(4) 情報処理 子どもたちとのかかわりや同僚との情報交換、保護者等からの情報収集など、情報の把握や分析、整理などがなされている。	1 2 3 4			
「III-1 メタ評価エリア」(平均)				/ 16 ()
授業実践のマネジメントに係る資質・能力	2			(1) 協働の活性化 同僚職員との情報や意見の交換、アドバイスなどに取り組み、相互の研鑽に取り組んでいる。
			(2) 連携の充実 保護者や地域の方々との情報交換、他校や異校種の教員との相互研鑽、各研修会等への参加など、連携に取り組んでいる。	1 2 3 4
	(3) 個に応じた支援体制の確立 子どもの実態や各ニーズ等を踏まえ、補充・発展的な指導を工夫するなど、個々に応じた支援体制の確立に取り組んでいる。		1 2 3 4	
	(4) 分掌等の充実 職員間の意見や情報の交換等に取り組み、相互の分掌機能を高めている。		1 2 3 4	
「III-2 コミュニケーションエリア」(平均)			/ 16 ()	
「III 授業実践のマネジメントに係る資質・能力」(平均)		/ 32 ()		

自己診断の記載

- 【評価基準】
- 1 = 適切な資質・能力の定着について課題がある。
 - 2 = 適切な資質・能力が十分定着しているとは言えない。
 - 3 = 適切な資質・能力が身に付いている。
 - 4 = 適切な資質・能力が十分に身に付いている。

<自己診断結果の確認>【自由記述のカルテメモ（Ⅳ－①）】

自己診断記録メモ			
第1回目	平成21年	月 日 () 「	」(於 ;)

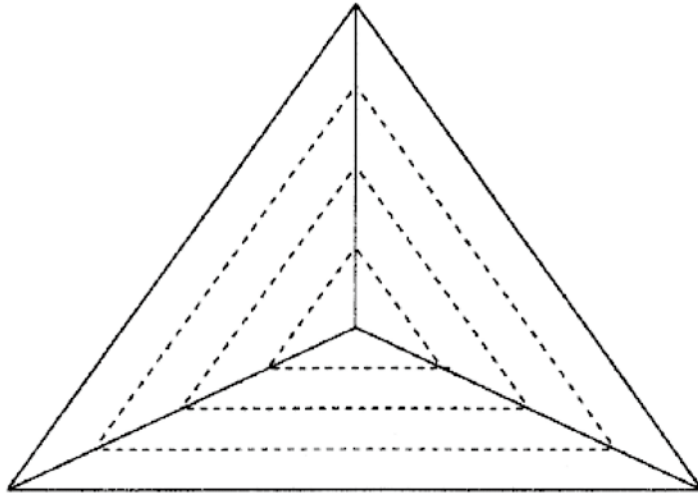
※ 各教科等独自の診断項目や課題等の気付きなどについて自由に記述します。

V 自己診断結果の確認

※ 記載方法；第1回目（赤），第2回目（青）

1 授業実践力（全体）のバランス

II 授業実践の中核を支える資質・能力



I 授業実践を根底から支える資質・能力

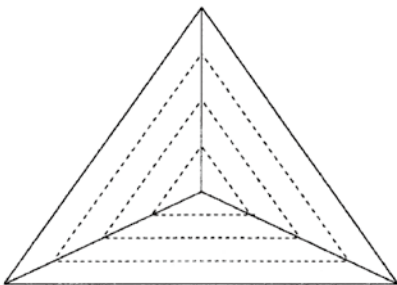
III 授業実践のマネジメントに係る資質・能力

2 各エリアのバランス

【I 授業実践を根底から支える資質・能力のバランス】

< 1 情意エリア >

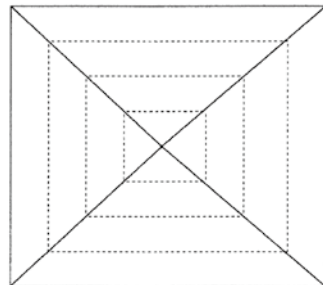
(3) 研修の重視



(1) 使命感の堅持 (2) 教育的情熱の高揚

< 2 研鑽エリア >

(1) 知性や感性, 創造性の涵養 (4) 自己啓発

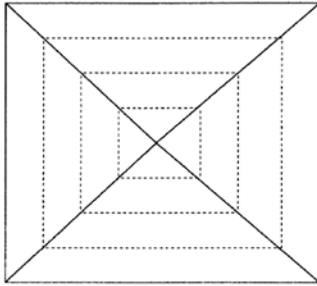


(2) 社会性の獲得 (3) 広い教養の獲得

【Ⅱ 授業実践の中核を支える資質・能力のバランス】

< 1 状況把握エリア >

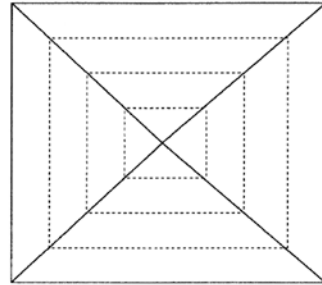
- (1) ミッション (4) 子どもの様子



- (2) 家庭状況
や地域情報 (3) 学校や学年,
学級の様子

< 2 理解・分析エリア >

- (1) 諸調査データ分析 (4) 教材分析

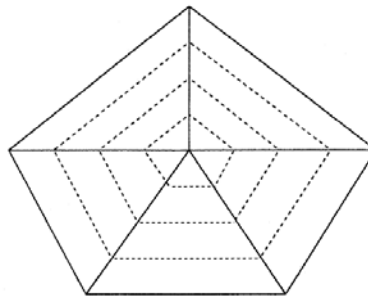


- (2) 観察データ等の分析 (3) 学習指導要領等
の確認・理解

< 3 指導エリア >

- (1) 授業デザイン

- (2) 授業の実際



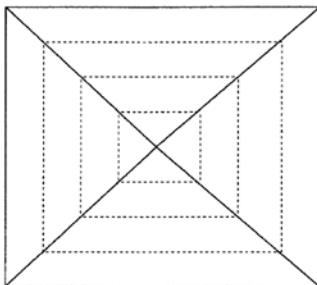
- (5) 授業の改善

- (3) 授業の評価 (4) 授業の分析

【Ⅲ 授業実践のマネジメントに係る資質・能力のバランス】

< 1 メタ評価エリア >

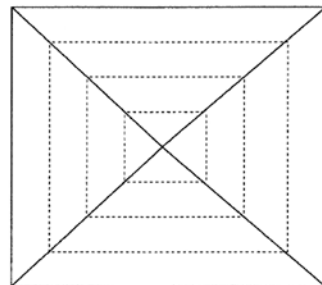
- (1) 授業実践の
評価・改善 (4) 情報処理



- (2) 授業環境の
改善・活用 (3) 危機管理

< 2 コミュニケーションエリア >

- (1) 協働の活性化 (4) 分掌等の充実



- (2) 連携の充実 (3) 支援体制の確立

VI 今後の改善に向けて

1 全体的なバランス (自己診断)

- ① 各エリアのバランスがとれている。
- ② 「Ⅰ」のエリアの改善が必要である。
- ③ 「Ⅱ」のエリアの改善が必要である。
- ④ 「Ⅲ」のエリアの改善が必要である。
- ⑤ 「ⅠとⅡ」のエリアの改善が必要である。
- ⑥ 「ⅡとⅢ」のエリアの改善が必要である。
- ⑦ 「ⅠとⅢ」のエリアの改善が必要である。
- ⑧ 各エリアの改善が必要である。

2 各エリアにおける改善策等【チェックエリアの記入例；Ⅰ－2－(4) 自己啓発】

診 断	チェックエリア	改 善 策 等
Ⅳ－① 実施日 / ()		
Ⅳ－② 実施日 / ()		

3 今後の実践に向けて (今の思いや決意を書き留めておきましょう。)

診 断	思いや決意等の記録
Ⅳ－① 実施日 / ()	
Ⅳ－② 実施日 / ()	